



びぶりお

University of the Ryukyus Library Bulletin Vol.35 No.2(No.134) April 2002

ベートーベンは無類の文筆家で読書家であった



田幸 正邦

ベートーベンは、56年(1770-1827年)の生涯に、現存する手紙でも1,650通を残している。これは、私達の想像を絶する数である。

また、ベートーベンは無類の読書家でもあった。彼が他界した時(3月26日)、部屋の中に約300冊もの蔵書があり、文学、哲学及び宗教書が中心で、ドイツ人の著作と外国人の著書のドイツ語訳があった。その中には、シェークスピア、ゲーテ及びカントの多くの作品が含まれていた。ベートーベンも、シェークスピアの実に多くの作品、"オセロ"、"ロメオとジュリエット"、"ベニスの商人"、"冬物語"、"御意のままに"、"リャ王"及び"テンペスト"等を愛読していた!

所で、彼の死の翌日発見された、宛名や年代が記されてない、"不滅の恋人"宛の3通の手紙の受け取り人が誰であるか、未だに解明されてない。これまで、多くの研究がなされ、膨大な研究論文が発表されたにもかかわらず、謎に包まれた状態にある。私は、この謎を解く鍵は、ベートーベンの音楽作品に秘められていると考えている。ここでは、その謎を追究したい。

交響曲第8番は、1812年7-9月にボヘミア地方

に滞在して作曲され、弟の居るリンツで完成された(10月)。第1楽章(へ長調)は、恋人との再会の喜びと、親密な語らいを表象している。第2楽章(変ロ長調)は、恋人と逢った後、再び会う約束をした他の地に馬車で向かう様を描いている。この楽章は、描写音楽の極めつけである。ベートーベンも手紙の第1信で、馬車で向かう途中、事故に見舞われたことを述べている。

第3楽章(へ長調)は、約束の地に到着したものの、恋人に再会することが出来ず、日を追うごとにあせりがあきらめに変わる心情を吐露したものである。これは、ベートーベンの並々ならぬ恋人への想いが伝わる楽章である。手紙で、数日後に再会する希望を述べている(第1信)。

第4楽章(へ長調)は、恋人に逢えない無念の情と、その衝撃から憤りに激変する心情を表象している。そして、最後に断腸の思いで恋人に決別を宣言するのである。

この様に、交響曲第8番はベートーベンの精神・心理の世界を見事に表象したもので、極めて独創的な作品である。この様な解釈は、しかしながら、彼が残した"不滅の恋人"に宛てた3通の恋文を理解することによって、初めて可能になった。

目次

ベートーベンは無類の
文筆家で読書家であった ……田幸正邦 1
情報発信基地としての図書館 ……藤田陽子 4
新入生オリエンテーション案内 …… 5

次

文献紹介：幕末の異国船来琉記と当時の
琉球の状況-④- …… 豊平朝美 6
お知らせ …… 8

さて、交響曲第8番は、ベートーベンが"不滅の恋人"に宛てた恋文と密接に関連する作品であることが解った。しかしながら、誰に宛てたものなのか、依然不明である。私は、交響曲第4番に、その答えが秘められていると洞察した！ この交響曲は、1806年に作曲された。ヨゼフィーネ・ダイムがベートーベンの心を独占していた頃である。ヨゼフィーネの存在が目ざされたのは、1957年に、13通のベートーベンから彼女への手紙と、2通の彼女からベートーベンへの返事の手紙の下書きが公表された時で、つい最近のことである。

ベートーベンは、1799年にヨゼフィーネ・ブルンスピックと初めて会い、ピアノの指導を姉のテレゼと2人に行く。しかしながら、彼女は母の強い勧めに従って、ダイム伯爵と結婚(同年)した。前述の公表された手紙は、それから5年後の1804年9月から1807年秋の間に書き記されたものである。

所で、ベートーベンは、ヨゼフィーネに恋文を書いた期間に、実に多くの傑作を残している。ロマン・ロランはいみじくもこの期間を"傑作の森"と称した。そこで、この期間に作曲された作品の中から代表的なものを選び出し、それらを独自の方法で分析して紹介したい。

ベートーベンがヨゼフィーネへの想いを音楽作品に最初に訴えたのは、ピアノ・ソナタ第17番"テンペスト"(1802年)である。この曲は、ピアノ教師としてヨゼフィーネ・ダイム婦人との交流の中で誕生するもので、第1楽章は夫を持つ彼女に魅了され、ついに恋に陥り、苦悩する姿を描いている。果たせぬ恋と知りながら、燃え上がる激しい思いを訴えるのである。そして、彼女への思いを精神の世界にまで昇華する様を、見事に第3楽章で表わしている。

ベートーベンとヨゼフィーネとの師弟の交流は、彼女の夫が病死したことにより、ベートーベン自身の内面で激変する。彼は心身共に彼女に奪われ、葛藤する中で、ワルトシュタイン・ソナタと熱情・ソナタを作曲した。

特に、後者の第3楽章で、ベートーベンはヨゼフィーネに、自分の思いを涙ぐましいほど切々と訴える。それは、宇宙を飛び回るヨゼフィーネを懸命に追っかけて、何度も何度も愛を告白する姿である。そして、その思いが極限に到達した瞬間に、ついに、自身の極めて大きな重力(ブラックホール)

の渦の中に、彼女を獲得するのである。これは、悩み抜いた末の恋する心の極限を表象したものである。

私は、熱情・ソナタは人間の創造力の極限の産物と評価している。自然科学の分野で、それに相当するのがアインシュタインの"一般相対性理論"(1916年)である。この理論に基づいて、後年宇宙にブラックホールの存在する仮説が提出(1939年)され、1970年代以降多くのそれが確認された。

ベートーベンは、自然の営みを理解したいとの好奇心が極めて旺盛で、前述のように科学書のみならず多くのジャンルの書物を読破しており、私達が舌をまくほどの博学者であった。従って、ニュートンの万有引力(重力)の法則(1665年)を理解していたであろう。彼が偉大な科学者でもあったことをうかがわせる話である。熱情・ソナタは恋の力が如何に強力であるかを私達に訴え、芸術と科学の創造の世界が融合していることを教えている。

幸福な2人の愛の空間と時間を表象したのが、バイオリン協奏曲である。この作品の中で、ベートーベンはヨゼフィーネの肉声を、バイオリンで見事に描写している！

ベートーベンはこの期間に、さらに、恋人"ヨゼフィーネ"の全人格を表象すると共に、彼自身の想いを凝縮した極めつけの曲を残している。それは、交響曲第4番である！ 彼女は1805年末に、ウィーンから実家のあるマルトンバシャーに帰った。従って、交響曲第4番(1806年)は、彼女を思慕して作曲されたものである。

第1楽章(変ロ長調)は、夫を亡くして深い悲しみに打ちひしがれているヨゼフィーネが(序奏)、徐々に本来の明るい姿を取り戻す様を描いたもので、実に初々しく、はちきれんばかりの若さと美を発散させている。女性の躍動感溢れる人間像を表象した極めつけの曲である！ 第2楽章(変ホ長調)は、ヨゼフィーネの優雅で繊細に加え、包容力あふれる知性美を見事に表象している。これは、ヨゼフィーネの波打つ心の臓の鼓動が聴こえるほどの、彼女との一体感を表象したもので、無我の境地のベートーベンに、神々しいまでの未来の希望の光がさし込む精神の世界を表した楽章である。

第3楽章(変ロ長調)では、波の様につる想いを、ヨゼフィーネにどう伝えたら良いものか悩むベートーベンに、彼女が優しく、愛らしく微笑みながら

話しかける様を印象的に描いている。第4楽章(変口長調)は、実家に帰ったヨゼフィーネに逢いたい気持ちをつのらせ、耐えることが出来ずに馬車で彼女の元に疾風(アレグロ)のごとく向かう様を描いている。

この様に、交響曲第4番は、1人の女性(ヨゼフィーネ)を絵画で見るが如くに描いている。女性の持つ本質的な特性(人間像)を、音の世界で表象したのは前人未踏の偉業と言えよう。シューマンは、この作品を、「ギリシャ神話の清純な乙女を連想する！」と評した。

この当時、ベートーベンが宇宙の彼方まで発散させるほどの強烈なエネルギーを、音楽の創造に傾注し、前述した極めて独創的な多くの作品を生み出すのである。ベートーベンは、ヨゼフィーネがこれらの作品を理解すれば、必ずや、彼女の永遠の愛を勝ち取る事が出来る、と信じていたであろう。そこに、ベートーベンの純粋な恋愛観を観た気がする。そして、それが、男性の普遍的な創造力の最も強烈な源であることを、私達は理解した。しかしながら、やがて、ヨゼフィーネがベートーベンを避ける態度を採る様になり、2人の交流は1807年の秋に終結した。

ヨゼフィーネは1810年に、子供達(4人)の教育を優先させ再婚するが、この結婚も彼女に幸福をもたらすことがなかった。彼女はやがて、財産を失って経済的に苦しくなり、1812年6月に親戚(母方)を頼ってプラハに向かい、当地でベートーベンと偶然再会したであろう。

ベートーベンは、ボヘミアに滞在している途中で、体調を崩しながらも作曲に専念するが、交響曲第8番の2楽章を作曲している時に、以前、ヨゼフィーネに逢いたい一心でウイーンから彼女の住む地に馬車を走らせた記憶が鮮明に浮かび上がったであろう。そして、この楽章に交響曲第4番の4楽章の手法を導入し、同じ変口長調、2/4拍子のソナタ形式で構成して、馬車を描写することによって、手紙の宛名、「不滅の恋人」、を特定する証拠としたのである！ 速度の違い、アレグレット(第8番)とアレグロ(第4番)、は年齢(41と35才)が異なることを表象したもので、彼は手紙(第3信)の中で、このことについて述べている。余談ではあるが、ベートーベンは、ボヘミア滞在中(7月19日)に、ゲーテと初めて会い、親しく歓談している。

第8番交響曲は、第2楽章のみが変口長調で構成されているが、ヨゼフィーネの全人格を表象した第4番では、3つの楽章(1,3及び4)がその調性で構成されている。これは、単なる偶然ではないであろう！ 従って、変口長調の調性は、ヨゼフィーネのキーワードと観るべきである。

交響曲第8と4番が、同一の女性にインスピレーションを得て創造されたものであることを理解して頂けたと思う。そして、宛名のない3通の恋文と関連づけて、後世の私達に難題を投げかけ、「解けるものなら解いてみよ！」、とばかりのことをベートーベンはやってのけたのである。

ヨゼフィーネは、その後不幸の一途をたどる。そして、1821年3月31日に、姉(テレゼ)の援助を受けながらも42才で命尽きてしまうのである。

残念ながら、当時の記録がベートーベンに残されていない。恐らく、ベートーベンはヨゼフィーネの訃報に接し、深い悲しみに陥ったであろう。彼もその時、病魔と闘争していたのである。その死闘の中で、ヨゼフィーネへの想いを最後のピアノ・ソナタ第32番(ジャズ・ソナタ;1821年)に集大成するのである。即ち、最終楽章の主題(アリエッタ)は、黒人霊歌を思わせ、来世への希望を歌ったものである。

このソナタの最終楽章(第3変奏にジャズの原型がある)は、ヨゼフィーネと再会する来世を描いたものであろう。これまで、必死に彼女と結ばれることを望み、努力したかいなく失った彼女を思慕して来世を描いたものであろう。この楽章は、彼女と来世で、やっと一緒に幸福な生活を暮らす事が出来る希望を歌ったもの、と解釈したい！

ベートーベンの後半の人生の、20年以上にわたって彼の創造力に影響を与えた女性が存在していたとは大きな驚きである！ ベートーベンは、少なからずの女性と恋に陥るが、その中でも理想の女性像をヨゼフィーネに見出したのであろう！ このことは、真の恋は、人生の中で一度だけ経験することを私達に教えている。母の姿が、彼女に2重写しに観えたのかも知れない。

幸いなことに、私達はベートーベンの作品から、彼自身のみならず、ヨゼフィーネの人間像を鮮明に描き出すことが出来る！ 彼女の肉声をも！！ それは、正しく聴く者の理想の女性の姿である！

(たこう まさくに：農学部教授)

情報発信基地としての図書館

法文学部総合社会システム学科経済学専攻 藤田 陽子

新入生の皆さん、琉球大学へようこそ！ 皆さんは今、大学生活に対して大きな期待と一抹の不安を抱えていることだろう。特に、勉学に関しては講義の科目名からして耳慣れないものばかりで、これから一体何が始まるのだろうか、と思っている人も多いだろう。

大学での勉強は、何よりもまず学生本人の積極性が求められる。受け身の姿勢でただ講義を聴いているだけでは学ぶ面白さは半減する。また、高校のように特定の教科書の内容を順番にこなしていくタイプの授業ばかりではないため、講義で得た知識を学生が自分なりに整理して理解しなければならない。大学での勉強をより楽しくし、後々何かの役に立つ知識として身につけるためには、自分からさらなる情報を獲得するアクションを起こさなければならない。そんな学生の努力をサポートしてくれるのが図書館である。

言うまでもなく大学にとって図書館は最も重要なセクションの一つである。もちろん、伝統的な「資料や文献を収集して貸し出す」ことが学生の勉学に欠かせないサービスであることは今も昔も変わらない。しかし、最近の図書館の様子は大きく変容しつつある。それは情報技術の進歩に伴う図書館の「情報発信基地化」である。

昨今の図書館はインターネットを中心とした情報ネットワークを用いて、単なる「本の貸し出し

係」から「学術情報の交流拠点」として生まれ変わることが求められており、本学の附属図書館においてもここ数年にわたりそのための努力がなされてきた。

具体例をいくつか挙げよう。最も代表的なのはWebOPAC（蔵書検索システム）やMAGAZINEPLUS（雑誌記事検索システム）等である。これはインターネットを通して図書館に所蔵されている文献情報を居ながらにして調べることができるシステムである。一昔前まで、図書館で資料を探すには大変な時間と労力を要した。小さな引き出しの中に数限りなく並んだカードを1枚1枚めぐりながら自分に必要な文献を探し当てなければならなかった。あるいは、書庫にずらりと並んだ本の中から1冊を見つけださなければならなかった。それが今では、探したい文献に関するキーワードさえ入力すれば、これとおぼしき文献のリストをあっという間に手に入れることができる。

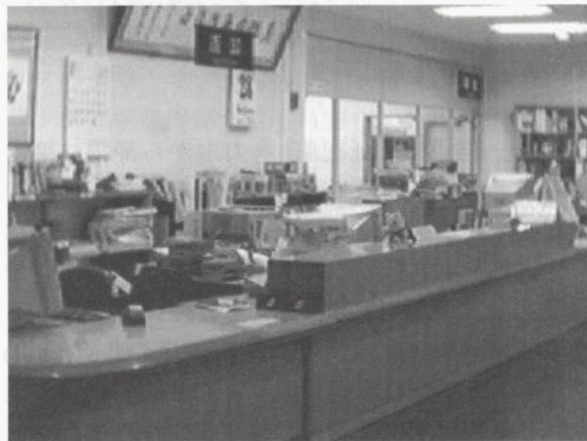
それから、琉大図書館にはオンラインで学術雑誌の掲載論文の概要やフルペーパーにアクセスできる電子ジャーナルも各種導入されている。これまでは新しい号が発刊された頃を見計らって図書館に足を運び、必要な論文を手元に置くためにコピー機の前に並ぶ、という面倒な作業をせざるを得なかったが、いまや自室のパソコンからネットを通してフルペーパーが読める。必要と思われる記事や論文はダウンロードしてハードディスクに保存すれば無駄なコピーもしなくてすむ。非常に便利である。私は個人的にこのサービスが一番ありがたいと思っている。今は英語文献に偏ってはいるが、これから日本語の電子ジャーナルが増えることを望む。

さらに、今後コンテンツやリンクの充実化をはかることによって大学の機能に大きな役割を果たすことが期待されるサイトに「授業ポータル」がある。ここからは、いくつかの授業や教官のホームページにアクセスできる仕組みになっている。今はまだリンクしている件数が少ないため、教官



[本館2階 情報ラウンジ]

[本館2階 カウンター]



にも学生にも知られていないが、将来的には、これまでバラバラに開かれていた各学部・学科あるいは教官による学生向けサイトを取りまとめることにより、学内の「総合学習サイト」となる可能性を秘めている。たとえば、今開講されている科目のテキストや参考文献の情報を、教官と図書館の双方がこのページを通して共有することにより、図書館から学生に対して所蔵情報を提供したり、未所蔵の場合は即座に購入したりといった連携も可能となる。

私が所属する法文学部総合社会システム学科経済学専攻では、1年次必修科目の「基礎演習」で情報リテラシー向上を目的とした演習を行っている。その中で、3年前から「図書館情報検索実習」を取り入れている。図書館電子情報係の方へお願いし、本や雑誌、新聞記事などの中から必要な情報を入手する手だてを数回にわたり指導していただくのである。ここでは、図書館ツアーに始まり、前述したWebOPACを中心とした様々な情報検索サービスの利用方法やデータベースの種類、図書館での各種手続き等について学ぶ。実習後の学生の評判は良好で、「図書館が身近になった」「図書館の効率的な使い方がわかったのでこれからもっと利用したい」という感想が集まっている。インターネットの普及と、書物や雑誌といった伝統的活字媒体とはトレード・オフの関係にあるように見えるが、ここでは情報検索のオンライン化が学生を活字に近づける役割を果たしている。

上述の他にも、図書館では様々な学術情報の電子化を進めている。各種サービスのオンライン化により図書館がより身近な存在になることは確かである。とりわけ講義に関しては、双方向性や即時性といった特徴を生かしてより効果的な情報提供を行うことが期待される。ただし、授業ポータ

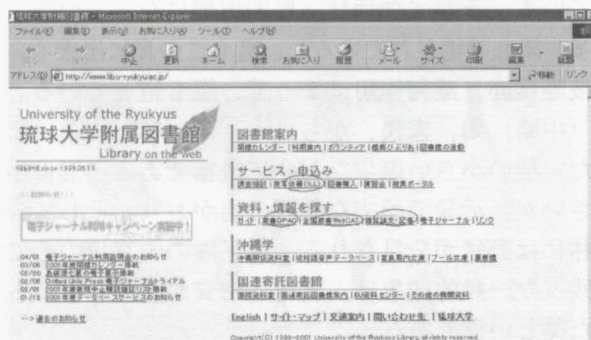
ルの内容を含め、各学部が提供している講義との連携という面ではまだまだ緒に就いたばかりであり、今後の発展が待たれるところである。そのためには我々教官の協力も不可欠であるし、学生からも積極的に要望をあげることが必要である。新入生の皆さんには図書館を敬遠することなく大いに利用してほしい。そして、希望があれば遠慮なく申し出よう。そうすれば図書館スタッフの方達もよりよいサービスを目指して尽力してくれるはずである。情報ネットワーク同様、図書館・学生・教官の三者のネットワークを有効に機能させて図書館の利用価値をさらに高めていきたいものである。

ふじた ようこ (法文学部助教授)

新入生オリエンテーション案内

図書館では、新入生のための図書館オリエンテーションを行います。充実した大学生活をおくるために、図書館の活用法をガイドしますのでご参加ください。

開催日	4月8日(月)~12日(金)
開催時間	14:00~15:00
集合場所	本館1階 多目的ホール
内容	図書館施設の案内 OPAC、ホームページの利用



[学外からも利用できる図書館のホームページ]

文献紹介：幕末の異国船来琉記と当時の琉球の状況④(完)

—琉球大学附属図書館所蔵沖縄関係資料から—

豊平 朝美

ペリー提督の遠征記第1巻の中から沖縄に関するものとして、前号で紹介した資料以外では、伊波月城が大正2年に「沖縄毎日新聞」に寄稿した「ペルリ日記」の連載記事がある(注1)。ペリー提督遠征記公式記録(3巻)の訳文について、これまで第1巻の訳本が、土屋喬雄、玉城肇の共訳(全訳)で『ペルリ提督日本遠征記』として昭和10年(上巻)と昭和11年(下巻)に臨川書店から出版されている。抄訳としては、1912年6月に鈴木周作の『ペルリ提督日本遠征記』が大同館から出版、昭和22年には同じタイトルの大羽綾子著書が酣燈社から出版されている。その他にもペリー提督遠征記に関する著書は出版されている。第2巻及び3巻を含む全3巻の和訳は最近になって、1997年(平成9)に『ペリー艦隊日本遠征記』として、オフィス宮崎翻訳で、栄光教育文化研究所から出版されている。

ペリー提督の日本遠征に参加している海軍士官には、科学者、文人等としても通用する者も少なくないといわれている。琉球の農業等の報告をしたモローやグリーン両医学博士、琉球の植物、民族誌等の報告や琉球語の収録をした人類学者のファーズ軍医補、地質学や天文学等の調査報告をした海軍従軍牧師ジョージ・ジョーンズ氏等である。唯一、例外的に民間人として参加し、著名な作家であり、沖縄本島の奥地探検の旅行記も書いたバヤード・テラー氏がいる。随行員の報告は公式記録『ペリー提督遠征記』第2巻に収録されている。ペリー遠征記の第2巻に収録されている琉球の農業等記したモローやグリーン等の報告は伊波月城が大正3年に「ペルリ日記より」の記事で、「沖縄毎日新聞」(注2)にその内容を紹介している。また、モロー博士の日記は須藤利一の訳著『異国船来琉球記』にも紹介されている。ペリー遠征記の主要な原資料の一つになっているペリー自身の自筆日記は1968年にあらたにロージャー・ピノーが編纂している。これについて訳本は、金井圓訳の『ペリー日本遠征日記』が、昭和60年に雄松堂出版から出版されている。

明治初期の沖縄の廃藩置県直後に来琉した博物学者ギルマードはこのペリーの遠征記について、「琉球に関するもっとも完全かつ詳細な記述」と評

価している(注3)。

ペリー一行の見た琉球の産業、地理、風習等を描写した個所を外間訳著『対訳ペリー提督沖縄訪問記』から何点が抜粋してみた。前文の括弧内の標目は筆者が記入した。

(首里への坂路) 郊外の曲がりくねった小路を暫く辿って、我々は那覇から首里に通ずる広い舗装道路に出た。それは素晴らしい街道で、英国の砂利敷きの道路に殆ど匹敵するものであった。両側の珊瑚岩の石垣は非常に精巧に結合されている。その建設には漆喰は全然用いられていないが、石は非常に良く合わされている。イタリーのサイクロプス畳石法を用いた石垣によく倣って建設されている。

(中城城跡) 要塞の資材は石灰岩であり、その石造建築は賞讃すべき構造のものであった。石は、その中の幾つかは四尺平方の立法体であったが、非常に注意深く刻まれて繋ぎ合わされているので、漆喰もセメントも何も用いていないが、この工事の耐久性を損なうようには思われなかった。

(売買) 販売される品物は主に紙、米、砂糖菓子、衣類などである。琉球人は常に通貨を持っていないと言ひ張り、彼等の商売は常に特定物品との物々交換であると言ひ張った。これは大体正しいかも知れない。というのは、彼等は僅かな金属通貨しか持っていない様子である。(中略)。

(産物等) 琉球の農産物及び畜産物は、非常に豊富である。甘蔗は繁茂し、農民は粗末な製糖法を知っている。砂糖及び酒が輸出される。この酒は米から蒸留法によって製造された非常に強烈な酩酊飲料である。彼らは亦、相当多量に煙草を作っている。そして喫煙は一般的習慣になっている。多少綿も栽培されているし、藍もこの島に出来る。彼等は亦、蒸発作用によって、塩も造っている。

(中略) 鶏、家鴨、がちょう、鳥、豚、山羊、また一種の小さい黒牛など全て豊富である。形は小さいが、活発で頑丈な種属の馬がおり、そして森林には野猪が発見される。遠征隊の士官達の心に残った一般的印象は、琉球は物資が豊富に備わった美しい島である。

(死者への扱い) 友人や親戚や、また、婦人たち

の行列(この婦人たちは頭と顔を隠す長い、白いヴェイルをかけている)にお供されて、立派に築かれた石の納骨堂、即ち丘陵の中腹に築かれた墓に葬られるのである。

(建築等) 建築に於いては、美術の他の部門よりも、もっと進歩の形跡がある。この島の南北に於ける城の遺跡や、首里城の建造物及び国中に見られるいろいろの橋、陸橋、道路などは、かなりの建築技術を示している。

(食生活等) 住民の食物は簡単で、大抵米と甘藷である。動物性食物は、下の階級の人々には滅多に用いられないが、肉を御馳走する時には、それは主として、豚肉である。

(勤勉) 琉球人は良く働く人々である。彼らは、労働から息抜きを楽しむことは殆どない。

その他、沖縄本島北部の塩屋湾に埋蔵されているという石炭の話(注4)や、男逸女労の琉球社会における女性の働きぶり(注5)、日本本土と沖縄の言語学的、人種的な類似性など多くの興味深い事柄が記載されている。

外国人によって書かれた見聞録等から、幕末時の琉球王府の外交政策、外国人に寄せた琉球の人々の異常なまでに高い好奇心等の他、琉球の自然風土、建築物、当時の人々の風俗・風習、生活事情など知ることが出来る。

終わりにあたり、プール文庫その他の外国文献の中から、当館所蔵の外国人来琉記に関する資料名を以下の通り紹介します。誌面の都合上、原書名を割愛し、和訳書名で表記した。記載にあたって、山口栄鉄編著『琉球：異邦典籍と史料』及び須藤利一訳著『異国船来琉記』等を参照した。

アンソンの『世界周遊記』(1740-44)、バックス大佐の『東洋の海』(1875)、ベニョスキー伯の『ベニョスキー伯航海回想録』(1790)、フランスの探検家、海軍大佐ラ・ペルーズの『ラ・ペルーズ世界

周遊記』(1799)、ドイツの東洋学者クラブロースの琉球記『アジア文学歴史言語録』(1810)、イギリスの海軍士官、地理学者ビーチの『太平洋ベリング海峡航海踏査記』(1831)、ドイツの宣教師ギュツラフの『東支那海沿岸航海日誌一付シャム・朝鮮・琉球記』(1834)、ベルシャアの『サマラン号航海記』(1848)、イギリスの博物学者ギルマード『マーチェサ号航海記』(1886)、ペリーに随行したドイツの画家ハイネの『シナ、日本、オホーツク海への遠征記』(1858-59)、大英教会の宣教師ビクトリア僧正スミスの『琉球とその人々』(1853)及び『日本滞在十週間』(1861)、ルヴェルトガの『世界周遊誌』(1883)、明治期の琉球の興味深い風物等の写真を載せている歴史学者レブンウォースの『琉球島』(1905)等である。

終わり

(とよひらともみ: 前図書館専門員)

(注1) 大正2年4月21日～6月23日「沖縄毎日新聞」(マイクロフィルム) 収載

(注2) 大正3年5月1日～6月1日「沖縄毎日新聞」(マイクロフィルム) 収載

(注3) 須藤利一著訳『異国船来琉記』 p.186

(注4) 外間政章訳著『ペリー提督沖縄訪問記』 p. 345

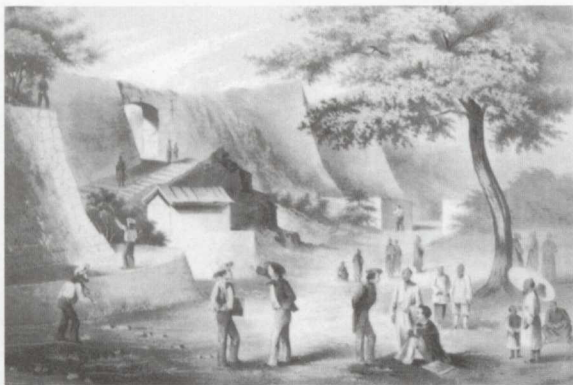
(注5) 照屋善彦執筆「十九世紀琉球の風俗」参照『風俗史学』13号 p.29-32

主な参考文献:

『沖縄毎日新聞見出集』(上一下) 沖縄県教育委員会発行、1999-2000

山口栄鉄編著『異国と琉球』、『外国人来琉記』、『琉球：異邦典籍と史料』

須藤利一訳著『異国船来琉記』他



左:当時の中城城跡(沖縄本島中部)
左右共『ペルリー提督日本遠征記』(1856年) 収録



右:当時の那覇の市場

お知らせ

◎ 開館案内 2002年4月～6月

4月							5月							6月						
日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土	日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6				1	2	3	4							1
7	8	9	10	11	12	13	5	6	7	8	9	10	11	2	3	5	5	6	7	8
14	15	16	17	18	19	20	12	13	14	15	16	19	20	9	10	12	12	13	14	15
21	22	23	24	25	26	27	19	20	21	22	23	24	25	16	17	19	19	20	21	22
28	29	30	31				26	27	28	29	30	31	23	24	26	26	27	28	29	
													30							

- ・ 開館時間 通常期：月～金 [黒字] 8:30～22:00 土・日・祝 [緑字] 13:00～20:00
- ・ 休業期：月～金 [青字] 8:30～17:00 土・日・祝 [赤字] 休館
- ・ 休館日 土・日曜（春季休業：～4/3）、開学記念日(5/22)、

※ 本館では当月、翌月の開館案内（カレンダー）を入り口及び掲示板に掲示しています。ご留意ください。（年間の開館案内はホームページをご覧ください）



☆は休業期 (上映13:30～)
 その他は通常期 (上映①15:00～)
 (上映②18:00～)
 上映場所：琉球大学附属図書館
 1階 多目的ホール
 又は1階AV視聴室(共同学習室)

【4月の予定】

- ☆4月3日(水) 十誡：THE TEN COMMANDMENTS /監督:セシル・B・デミル/1923/アメリカ映画 137分
- 4月10日(水) 黄金時代：L'AGE D'OR /監督:ルイス・ブニュエル、踊るパリ/幕間：PARIS QUI DORT/ENTR' ACTE /監督:ルネ・クレール/19/フランス映画 120分
- 4月17日(水) 会議は眠る：DES KONGRESS TANZT /監督:エリック・シャレル/1931/ドイツ映画 97分
- 4月24日(水) E.T.：The Extra-Terrestrial /監督:スティーブン・スタイルバーグ/1982/アメリカ映画 115分

【5月の予定】

- 5月1日(水) バックトゥ・ザ・フューチャー：BACK TO THE FUTURE /監督:R・ゼメキス/1985/アメリカ映画 116分
- 5月8日(水) 或る夜の出来事:IT HAPPENED ONE NIGHT /監督:フランク・キャブラ/1934/アメリカ映画 105分
- 5月15日(水) お熱いのがお好き：SOME LIKE IT HOT /監督:ビリー・ワイルダー/1959/アメリカ映画 122分
- 5月23日(木) アパートの鍵貸します：THE APARTMENT /監督:ビリー・ワイルダー/1960/アメリカ映画 121分
- 5月29日(水) パットン大戦車軍団：PATTON /監督:F・J・シャフナー/1970/アメリカ映画 172分

【6月の予定】

- 6月4日(水) 戦場にかける橋：THE BRIDGE ON THE RIVER KWAI /監督:D・リーン/1957/アメリカ映画 162分
- 6月12日(水) 吸血鬼ノスフェラトゥ：NOSFERATU /監督:F・W・ムルナウ/1922/ドイツ映画 64分
- 6月19日(水) リリー・マルレーン：LILI MARLEEN /監督:R・W・ファスビンダー/1981/ドイツ映画 120分
- 6月26日(水) フレンチ・コネクション：THE FRENCH CONNECTION /監督:W・フリードキン/1971/アメリカ映画 104分

琉球大学附属図書館報 “びぶりお” 第35巻 第2号 (通巻第134号)

平成14年4月1日発行

発行：琉球大学附属図書館 〒903-0214 沖縄県中頭郡西原町千原1番地

電話 098(895)8168 Fax.098(895)8169